

報告

英語プレゼンテーション研修会の報告

上村和秀^{1,2}

¹⁾中部大学生命健康科学部、²⁾生命健康科学研究所ヘルスサイエンスヒルズ部門

1. はじめに

基礎研究を担う研究者を目指す上で英語プレゼンテーション能力が必要であることは言うまでもない。日々の地道な研究活動の末に得られた成果も、英語論文として公表するとともに国際学会で発表することで、少しでも多くの研究者にその価値を理解してもらえることになる。自らの研究を国際学会で発表することで、それが新規かつ独創的なものであることを確認するとともに、一つの研究発表が自他を問わず次の研究の出発点となり、研究全体が発展していくことにつながる。

最近では、生命科学や医療系の国内学会においても、口頭発表のすべてを英語としたり(日本ウイルス学会)、ポスター発表の一部のセッションを英語としたりする(日本循環器学会)など、学会をあげて国際化に対応しようとする傾向がみられる。これは欧米出身者に加えて、急速に増えつつあるアジア諸国出身の研究者あるいは留学生とのコミュニケーションという意味が大きい。こういった研究者あるいは留学生に対して、アカデミックなコミュニケーションは英語で行うという環境を整えていくことで、研究をめぐる日本の国際的な地位の向上あるいは維持につながる。

グローバル化の進行は研究の世界だけではない。今や地元企業の人事採用担当者からも、若手社員に対する英語能力取得への期待を耳にする時代である。大きな発展を遂げつつあるアジア諸国とのパートナーシップは大きなビジネスチャンスであり、企業活動の維持発展には不可欠だからであるだろう。

このように見渡してくると、英語のスキルはもはや、欧米に追従するために一部の人が取得すればよいという時代から、研究者のみならず、できるだけ多くの職業人が身につけるべきある種のリテラシーへと変遷してきていると言える。

そこで、中部大学生命健康科学部研究所として、未来

の研究者あるいは高度職業人を目指す学生・大学院生に対して、英語スキル向上の機会を提供することは極めて有意義であると考えられる。本学には多くの経験豊富な英語専任教員がおり、PASEO といった実践的な英語能力を取得するためのプログラムも存在する。そこで、研究所の活動として英語にまつわる研修会を開催するのであれば、研究活動に特化した英語スキル向上の機会を提供するのが良いと考えられた。すなわち、「自らが日々取り組んでいる研究内容とその成果について、英語で情報発信できるようになる。」という目標を設定した。自らの活動を題材にすることにより、英語スキル取得に対するしつかりとしたモチベーションをもってもらおうという意図である。かくして、「英語プレゼンテーション研修会」を研究所の活動として企画することとなった。筆者は日本における科学英語教育の第一人者の一人であるフィリップ・ホーク先生と静岡県立大学薬学部において科学英語の授業を共同担当していたご縁があり、同先生を本研究所における英語プレゼンテーション研修会の講師として招聘することができた。

2. 講師について

フィリップ・ホーク先生はカナダの生まれで、名門トロント大学出身の言語学を専門とする研究者であるとともに、現在は静岡県立大学薬学部で科学英語教室を主宰して、同大学において科学英語にまつわるさまざまな教育活動に積極的に従事している。医学あるいは生命科学の領域で馴染みの深い出版社である羊土社から、英語プレゼンテーションに関する著書¹⁾を上梓していることでもよく知られている先生である。この本は英語プレゼンテーションにとって必要な基本のすべてを網羅しつつも、読む側の英語力に左右されずに大変分かりやすく書かれたものであり、できるだけ少ない努力でより多くの成果を上げさせたいという同先生の日本人に対する科学英

語教育への情熱が伝わってくる好著である。

3. 英語プレゼンテーション研修会について

これまで生命健康学研究所主催の英語プレゼンテーション研修会としてフィリップ・ホーク先生を講師に招き、H28 年度、H29 年度の 2 回にわたり開催してきた。H28 年度は学部生 1 名、大学院生 3 名、教員 1 名の計 5 名、H29 年度は学部生 1 名、大学院生 1 名の計 2 名であった。日程は 2 日間、休憩を挟んで 3 時間程度ずつ実施、最後には公開の成果発表会を実施した。事前に講師より英語プレゼンテーションの基本に関する手作りの教材が配布され、参加者には教材を参考に自分の研究について指導教員とも相談しながら 5 分程度の英語によるパワーポイントとスピーチ原稿を作成して研修 1 日目に発表を行った。その発表に対して講師からスライド、英語の発音やイントネーション、全体構成などについて、具体的な改善に向けたアドバイスを受けた。参加者はその場で講師の指導にもとづいてスライドと原稿を書き直すとともに、発音やイントネーションについて繰り返し練習を行った。その一週間後に実施された研修 2 日目までに必要に応じて各自でプレゼンのさらなる修正と自宅練習を行ってもらった。研修 2 日目は練習の成果を確認するための最終の発表練習を行い、その後公開の成果発表会を行った。このように自らの研究内容について 5 分程度の短いプレゼンテーションを何度も繰り返し練習していくうちに参加者たちは自信を深めていき、成果発表会では皆堂々たる発表ぶりであった。発表は講師によってビデオ撮影され、後日コメントをつけて参加者へフィードバックされた。研修会を通じて印象的だったことは、英語の発音、イントネーション、身振り、手振り、決まり文句といった語学としての指導にとどまらず、プレゼンテーションの論理構成を丹念にフォローしてくれていたことである。ここで、講師が強調していたスキルをひとつだけ紹介すると、「実験結果を示すスライドのタイトルは、必ず主語・述語・目的語からなる文章の形式で書く。」ということである。こうすることで伝えるべきことがより明瞭になるとともに前後とのつながりもより明確になる。このような明快に伝えるための論理構成の工夫は母語でプレゼンテーションを行う上にも多いに参考になるものである。

4. さいごに

グローバルな展開を志向する研究教育活動と地域に根ざした研究教育活動は、これまであたかも別個の課題のように扱われることもあった。研究をはじめとする創造的活動は限られた場所(ローカル)で実施されるものであるが、情報通信や移動手段が高度に発展した昨今では、その成果を必要とし、受け入れる場所もまた世界中にいくつも存在する(グローバル)。このようなグローカリゼーションの時代を生きていくためには、国際的に通用する言語で情報発信する能力がますます重要になる。今回、英語プレゼンテーションを完成し、公開の場で発表するという難しい課題に果敢に挑戦して見事に成功を収めた学部生、大学院生には心から敬意を表したい。今回の研修会をきっかけとして英語スキル取得に持続的な関心をもってもらえることを望みたい。

引用文献

- 1) Phipp Hawke, Robert F Whittier 著 日本人のための絶対できる英語プレゼンテーション 羊土社 (2011)

Title: A report of the seminar for scientific presentation in English presented by Institute of Life and Health Sciences

Author: Kazuhide Uemura^{1, 2)}

Address(es): ¹⁾ Department of Biomedical Sciences, College of Life and Health Sciences, and ²⁾ Institute of Life and Health Sciences, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan

Keywords: English, Scientific presentation